

令和8年度 北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和8年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	3～6学年は目標値を上回ったが、2学年が目標値を1.7ポイント下回る結果となった。特に2学年の「書くこと」や6学年の「理由を明確にして記述する力」に課題がある。低学年からの文作り指導や、高学年での構成を考えた文章表現の指導を継続する。
社会	5学年は目標値を15.7ポイント上回り非常に良好だが、6学年は区平均を3.4ポイント下回った。資料を読み取る力や、複数の資料を関連付けて考える「思考・判断・表現」の力、用語（八方位など）の定着に一部課題が見られる。
算数	3～5学年は目標値を上回ったが、2学年と6学年が目標値を下回った。2学年の「時計・形」、6学年の「分数の計算」など、特定の基礎技能の不足が顕著である。図や言葉を用いた具体的なイメージ化と、数学的根拠に基づいた説明力の育成に重点を置く。
理科	5学年は前年度比12.2ポイント向上し良好だが、4学年と6学年が目標値を下回った。特に顕著な課題として、顕微鏡などの実験器具の操作技能や、理科学語（結露など）の定着、実験結果から論理的に考察する力が挙げられる。
外国語	全体の正答率は目標値を上回った。リスニングによる音声理解は極めて良好である一方、アルファベット（特に小文字の j, b, l, g など）を正確に書く活動に顕著な苦手意識やつまずきが見られる。

本校の教育目標
◎よく考える子
◎体をきたえる子
○思いやりのある子
○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
・「北区基礎・基本の定着度調査」等の結果を基に個に応じた指導を充実させ、「読み・書き・計算」の習熟と各教科の基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指す。 また、習熟度別指導、学力フォローアップ教室での補充等、組織的な指導体制や指導方法を工夫して更なる学力の向上を図る。 ・発達段階に応じた思考力・判断力・表現力や学びに向かう力を養うとともに、基礎的・基本的な知識・技能を活用した発表や話し合い活動等の言語活動を充実させ、問題を解決する能力の育成を図る。 ・教科等の見方・考え方を働かせた主体的・対話的で深い学びの実現のため、教科等横断的な指導を進めていく。また、授業観察による指導・助言や校内研究・研修の充実を通して授業改善を図る。

学力向上にかかわる経営方針
「学校は勉強をするところ 集団生活(社会性)を学ぶところ」 ・子どもが達成感と満足を感じ、挑戦しようとする意欲をもつ学校づくりを推進 「確かな学力の定着」 ・少人数習熟度別指導、個に応じた指導・補充学習・家庭学習・校内研究

校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会(研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会)、分掌(授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室(学力フォローアップ教室)等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・WEBQ－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・放課後補充教室(フォローアップ教室)の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進(個別最適化した学習) ・日本語学級の充実と担任との連携 ・算数科少人数習熟度別指導(3～6年)による確かな学力の定着	・北区教育委員会および東京都小学校体育研究会の研究協力校として、体育科の健康課題をテーマとした授業改善と、自ら学び続ける力を仲間とともに身に付けていく授業の研究の推進 ・授業観察を通じた具体的な指導・助言の実施及び、組織的な授業改善 ・サブファミリー内での指導方法の共有 幼小中学校間の交流指導を通じた連携研修及び、義務教育9年間を見通した系統的な授業改善の推進	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善(きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用) ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行(月1回) ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（6年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	全体の平均正答率（68％）は目標値（61.2％）を上回っているものの、区平均（69.2％）を下回っている。特に「説明文の内容を読み取る（校内58.5％、区67.1％）や「レポートを書く」（校内46.2％、区50.8％）「文章を書く（校内50.3％、区56.2％といった領域に課題が見られる。	単語や語句の意味・使い方を理解し、実際に活用できる能力を養うため、説明文や物語文の中で新出語句を辞書で確認する活動を継続する。説明文では、接続詞に着目させて文章構造を把握させ、段落ごとの要点を整理する指導を強化する。また、150字程度の作文指導を定期的に行い、書いた文章を推敲・修正して、より分かりやすく効果的な表現にする活動を取り入れる。	他教科でも文章を書く活動を積極的に取り入れ、文の構造を意識させる。ICT端末のコンテンツ（ミライシード、マイアセス等）を活用し、個々の習熟度に合わせた練習問題を繰り返す。
社会	平均正答率（69.3％）は区平均（72.7％）を下回っており、特に「日本の農業（校内51.9％／区58.8％）」や「日本の水産業（校内58.5％／区75.0％－目標値）」、輸送手段の特徴や貿易に関する問題で課題が顕著である。資料を適切に読み取ることや、社会の言葉を正しく理解し活用することに依然としてつまずきが見られる。	教科書、写真、動画などの視覚的情報を豊富に活用し、用語の意味を実感としてとらえさせる。体験的活動をもとに、各自が抱いた課題や解決案を整理、まとめさせる工夫を行い、主体的・探求的な学びを促進する。	教科書、写真、動画などの視覚的情報を豊富に活用し、用語の意味を実感としてとらえさせる。体験的活動をもとに、各自が抱いた課題や解決案を整理、まとめさせる工夫を行い、主体的・探求的な学びを促進する。
算数	全体の平均正答率（67.0％）は区平均（72.1％）より5ポイント以上低い。特に「分数の計算（校内65.7％／区76.7％）」で約11ポイントの大きな開きがあり、約分・通分や計算の仕組みの定着が不十分である。また「円グラフや帯グラフ・平均」の領域も区平均を下回っており、基準量と割合の関係を理解し、根拠を説明する記述問題（通し番号30）などで苦戦している。	具体物や視覚的モデルを活用した導入を行い、計算方法の暗記だけでなく「なぜそうなるのか」を児童自身の言葉で説明させる活動を重視する。習熟度別学習では、支援が必要なクラスの人数を最小限にして手厚く指導する。図形やグラフの読み取りでは、ICTを活用して視覚的に操作・分析する活動を取り入れる。	パワーアップ講師と連携した個別支援や、家庭学習での既習事項のドリル学習を徹底し、基礎の定着を図る。ICT端末のアプリを活用し、個々の課題に合わせた練習問題に取り組みさせ、思考力・判断力・表現力を高める発展問題にも挑戦させる。
理科	全体の平均正答率（55.3％）は目標値（56.3％）および区平均（59.8％）を下回っている。特に「けんぴ鏡の使い方（校内21.7％／目標35.0％）」や「物のとけ方（校内49.1％／目標50.0％）」、「電流のはたらき（校内47.8％／目標53.3％）」、「天気の変化（校内39.6％／目標50.0％）」といった実験・観察に関わる知識や技能に課題が多い。	理科支援員と連携し、予備実験や事前準備を徹底することで、実験結果を正しく理解できる環境を整える。実験操作の具体的な練習時間を確保し、顕微鏡などの器具を正しく使えるようにする。実験記録を正確に残す習慣を付け、「何が分かったか」「なぜそうなるのか」を自分の言葉で考察させる指導を強化する。	ICT機器を活用して実験の様子を撮影し、いつでも振り返りができるようにする。小テストを適宜実施して重要用語や実験手順の定着を図るとともに、学習内容を実生活（天気予報や身近な電化製品等）に結びつけ、児童の興味関心を高めていく。